

# 2023年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～



遊んで、遊んで、とことん遊び込む！！

～生き物との関わりにおける対話を通じた学び～



岐阜市立岐阜東幼稚園

園長 藤井 佐由美

# 目次

1	はじめに	P1
2	研究主題「科学する心」について	P1
3	生き物とのふれあいを通して育まれる「科学する心」のイメージ図	P1
4	研究内容について	P2
5	実践事例	
	（PART：I）	P2
	発達過程に見る生き物との関わり方とその深まり方（PART：II）まで	
	（PART：II）	P5
	5歳児「A児」と「B児」を中心に、「生き物との関わり」における「対話」を通じた 「豊かな感性」と「創造性の芽生え」の育ちと変容	
6	まとめ	P14
7	今後の方向性について	P15



# 1 はじめに

昭和49年に開園した岐阜市立岐阜東幼稚園は、岐阜市の東部に位置し、田畑に囲まれた穏やかな環境の中にある。令和4年度の園児数は、3歳児20名、4歳児10名、5歳児14名の各学年ークラスずつ、合計44名の小規模で家庭的な園である。

「科学する心を育てる」テーマに基づいた研究の取り組みとしては2年目となる。昨年度までに、子どもの小さな心のときめきに、教師が気付き、寄り添い、理解することを通して、子どもは、A: 気付き、感じる段階、B: 問いや願いをもち、知ろうとしたり考えたりする段階、C: 見立て、思いをめぐらせ、試行錯誤する段階、D: 伝え合い、分かち合う中でイメージを広げる段階を繰り返すことにより、集団としての「科学する心」が育まれることが分かってきた。しかし、その過程の中で一人一人の子どもが、何を感じ、どのように心を動かし、どのような経過で心情の変化があったのかについて研究を深めることができなかった。

そこで、今年度は、これまでの研究の中で大切にしてきた「科学する心を育てる」4段階の過程に加えて、3、4、5歳児の3年間にわたる感じ方、考え方の違いや育ちを比較しながら読み解いていく。また、輪になって語り合う:「こども会議」や、教師間の研究討議:「おとな会議(写真やドキュメンテーション、プレゼン等を通して多様な考えを紡ぎ合わせる)」から見えてくる子ども理解にも重点をおき、一人一人の子どもの心の育ちや教師の見方、考え方の変容についても研究を深めていきたいと考えた。

# 2 研究主題「科学する心」について

本園は、創立当初から、子どもたち一人一人に、心豊かでたくましく生きる力の基礎を育んでいくことを大切にしている。そのため、子どもの自発的な活動としての「遊び」を重要視し、「遊んで、遊んで、とことん遊び込む教育」を、日々展開している。

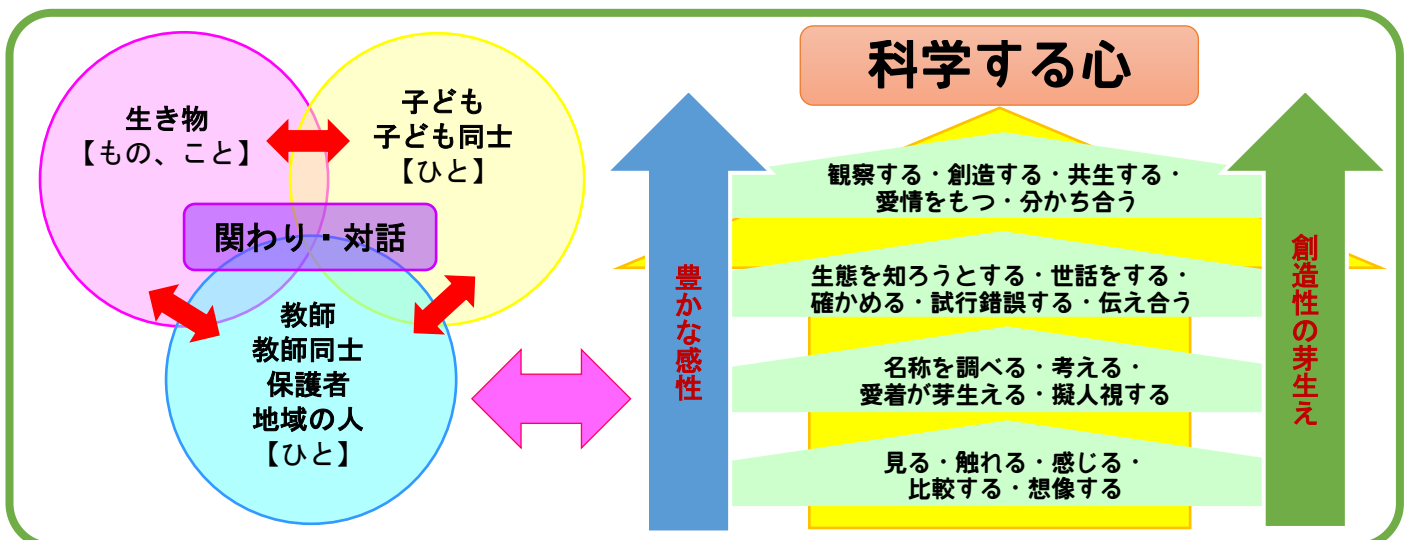
子どもは、日々の生活の中で生き物、草花、水、風、土・・・などの様々な環境と出会い、気付いたり、感じたりしながら、その「もの」や「こと」を自分の遊びや生活の中に取り込もうとする。「もの」や「こと」との出会いの中で、その不思議さや面白さを見付け、美しさや優しさ、愛おしさなどを感じ、心を動かし、それを声や言葉、身振り、素材等を通して表現する。子どもは、その対象と心ゆくまで関わる中で、自分なりに感じ考え、他児と分かち合い、イメージを広げることを通して、感性や創造性を豊かにしていく。

本研究では、「生き物との関わり」を取り上げ、子どもの「科学する心」がどのように育まれるのかについて仮説を立てた。

子どもは生き物との出会い「ものやこと」を通して、喜び、驚き、悲しみ、怒り、恐れなどの情動が生まれ、心が動かされ、何かを感じ取り、自分なりのイメージをもつこととなる。それを「ひと」と共有する中で、自分の気持ちや考えを自分なりの表現で伝え合うことを通して豊かな感性が磨かれる。このような「ひと」との関わり・対話により、子どもは多様な感じ方や考え方に気付き、自分と相手との感性の違いや同じを感じ取っていく。その繰り返しの過程の中で、豊かなイメージを蓄積し、新しいものを創り出そうとする力につながるのだと考える。つまり、「生き物」との豊かな出会いの中で、発達の過程に応じて関わりながらその面白さや不思議さに気付き、対話を重ねて新たに知ったり、更に考えたりする。ときには「死」や「生」に遭遇して一人一人の子どもが、何かを感じ取り表現したり、「知りたい」という知的好奇心の高まりにより、調べたり、伝えたりする。子どもは、様々な出来事に遭遇する中で、新しい知識となったり、これまでの知識が体験と重なったりする瞬間に出会うことになる。「生き物との関わり」では、ときに子どもが予想もしない出来事が生まれることがある。直接体験を共有することにより、自分なりに思いを巡らせ、表現しようとする気持ちが高まり、他者と気持ちや考えを伝え合い、試行錯誤する中で、「科学する心」は育まれると考える。

そのために教師は、子どもの心が揺さぶられたときを逃さないように、共に心を動かし、感動したり、驚いたり、喜んだり、悲しんだり、迷ったりしながら子どもと共に考え、伝え合う場面を大切に保障し、遊びを相互に創り上げる必要があると考える。また、「生き物」との関わりは、一定期間、継続的に飼育、観察を続けることでしか知り得ないことも多い。一人一人の子どもの発達に応じて、教師が手助けしながら機会を逃さず、自然の摂理や変化に気付いていけるよう、意図的・計画的な取り組みの中で援助することが大切であると考えた。

# 3 生き物とのふれあいを通して育まれる「科学する心」のイメージ図



## 4 研究内容について

「生き物との関わり」では、「愛おしい」と感じる気持ちを通して、「生命の尊さや大切さ」などを知ってほしいと願うが、子どもが辿る発達の道筋は一直線上ではない。子どもは、「生き物との関わり」を通して、その面白さや不思議さ、偉大さや儚さをどのように感じ取っていくのであろうか。

始めに、3歳児、4歳児、5歳児の実践事例から3年間を通じた感じ方・考え方の違いと育ちの過程を読み解き、探っていく。

次に、5歳児の実践事例から2人の子どもの具体的な心の動きを読み解く中で、どのように「豊かな感性」と「創造性の芽生え」が育まれるのかについて、述べていきたい。5歳児の実践事例では、特に「対話」に重点を置き、研究を進めることとし、子どもたちが、答えのないことに直面しながらも自分なりに考え、行動していく過程を読み解く。また、「対話」の時間を「こども会議」と名付け、子どもたちが、不思議に感じたり、疑問が生まれたり、困ったりした場面を、教師は逃さないようにその都度「こども会議」を通して子どもたちの純粋な気持ちや考えを伝え合い、感じ合い、新しい考えや価値を積み上げていく過程を丁寧に考察しながら探していきたい。

加えて、子どもの心の動きを読み取ることを通して、教師間の「おとな会議」による紡ぎ合いの中で、どのように教師の見方や考え方が変容していったのかについて考察し、まとめていきたい。

研究内容①：3歳児、4歳児、5歳児における「生き物との関わり」の感じ方・考え方の違いや育ちの過程

研究内容②：5歳児「A児」と「B児」を中心に、「生き物との関わり」における「対話」を通じた「豊かな感性」と「創造性の芽生え」の育ちと変容

研究内容③：教師間の「おとな会議」を通じた教師の見方や考え方の変容

## 5 実践事例

### (PART: I) 発達の過程に見る生き物との関わり方とその深まり方 (PART: II) まで

#### 【1 ダングムシとの出会い】 3歳児 R4年5月上旬

##### 見る・触れる・感触を楽しむ・遊ぶ

小動物に興味があるa児は、ダンゴムシ見つけに夢中で、地面に顔を擦れ擦れに近づけながら、じっくり探す毎日だった。見つけると嬉しそうにつまんで手の平にのせ、モジモジ歩く様子や丸くなる様子に、「丸くなった。」と言って目を細めていた。捕まえては、ゼリーの空き容器に入れていくので、1時間ほど経過すると、ダンゴムシが小さなカップの中でひしめき合っていた。

通りすがりの5歳児が、「土がないと死んじゃうよ。」とアドバイスをくれたことを受け、担任は、a児・b児と共にダンゴムシの『お家』を作ることにした。飼育ケースに花壇の土を敷いて、その中にダンゴムシを入れておいた。すると、再び、先程の5歳児が、「水で湿らさないでダメだよ。」とアドバイスをくれた。担任は霧吹きを用意し、子どもが自分で水をあげられるようにした。調子よく霧吹きで土を湿らせていたa児たちだったが、しばらくすると水をかけることが面白くなり、飼育ケースの中は水浸しになり、1cmほどの水面の中でダンゴムシが動かなくなっていた。



#### 【考察・教師の思い】

ダンゴムシはその小さくて丸っこい形状から子どもに人気の生き物で、モゾモゾと動く様子と触ると丸くなる様子に心を奪われるようである。加えて、小さな子どもでも比較的容易に捕まえることができることから3歳児にとっても身近な生き物の一つとなっている。人生で、こんなにも地面擦れ擦れに顔を近づけて虫見付けに夢中になることがあるだろうか。a児は何故こんなにも夢中になれるのか、興味の先をのぞいてみたいと思った。

a児は、動く小さな生き物に興味があり、小さいものでもよく探し出し、すぐに触れてみるといった遊び方が見られた。特にカエルはプニプニした感触がお気に入り、指先でさわり続けていた。そのため、時には触り過ぎて死なせてしまうこともあった。また、力加減が難しいからか、特にチョウの成虫などは、捕まえて網から取り出す際に強くつかみ過ぎてグツリしてしまうことがほとんどであった。チョウに限らず、死んでしまうと興味はなくなるようで、放置し気にならなくなっていた。

これらのことから、a児は、動くものに興味があり、それを「捕まえてどこか(何が)動いているのか確認したい」、「形状を見てみたい」、「触って感触を確かめたい」などの願いのもとに生き物との関わりを楽しんでいるのではないかと考えた。この時点で、a児の中に「生き物を大切にしよう」とか「生きられるように家を作ろう」という発想や興味・理解はなく、「小動物に触れたい」という一心で関わっているのではないかと考え、思う存分触れる時期を保障することが大切であると考えた。

#### 【おとな会議】

日常の子どもたちの生き物との関わり方が話題になった。

教師A：子どもにとって生き物ってどんな存在なんだろう？

教師B：とても身近な存在で、傍にいただけで癒されたり、心が動いたりする存在だと思う。

教師C：子どもは時に残酷な扱いをすることがあるが、そういう姿についてどう思う？

教師B：生き物が単なる“もの”にならないようしないといけないとは思いますが、むやみに止めたりしないかな。

教師D：私は、子どもが生き物をなぶり殺しにしている姿を見ると、「かわいそう！」と思って、言っちゃう。

教師C：その気持ちも分かるよね。でも、「大切にしよう」という思いをもつには、いろいろな経験を積むことが必要かもね。

教師A：足がちぎれても、まだ生きていことに不思議さを感じている姿もあるよね。

教師C：そうだね。きっと正解はないんだと思う。でも、こうやって多様な考え方を伝え合って、様々な考え方があることを知ることができたことに意味があるよね。

特に、3歳児の子どもは、生き物との関わり方が、時に残酷に見えることも多い。それを、教師がどう捉え、どう援助するかを話し合う機会にたかたか。当然、子どもが抱えている背景により、原因があるときには、気持ちを受け止め、行為を修正していく必要があるだろう…。しかし、子どもが興味の深まりの中で死なせてしまう場合は、教師が子どもの興味をよく読み取った上で、援助することも必要である。「生き物との関わり」の見方・考え方については、日々、子どもの姿を通して、教師間で多様な考え方を伝え合い、確認し合うことにより、一人一人の教師が自分の見方・考え方を整理したり、新しい価値観をもったりする機会となるため、大切にしていきたいと思った。

## 【2 キアゲハの羽化に遭遇】 3歳児 R4年6月

感じる・変化を知る・関わる・比較する・想像する・不思議に思う・美しいと思う

5月にc児が家庭から持ってきたキアゲハの幼虫が羽化した。パセリを食べて大きくなった幼虫が、蛹になりそして成虫になった。3歳児でも一目瞭然の変化が見られるキアゲハの羽化には、多くの子どもが興味をもった。また、そのキアゲハの形や色の美しさから、d児の「かわいい。」という表現が飛び出した。e児は4人きょうだいの末っ子であることから羽化を見た経験があるようで、キアゲハを見て「外に行きたいって言うてる。逃がしてあげようよ。」と言った。a児も一緒に外へついていった。担任が「キアゲハは、どんなところが好きなの？」と尋ねると、c児は「お花のところ。お花の蜜がご飯なんだよ。」と言った。担任は、子どもと一緒に幼稚園の花を探すと、子どもたちは、プランタに咲いているパンジーを見つけて「ここにあるよ。」とf児が口火を切ると、次々と「ここにもある。」とまた一つのパンジーやビオラのプランタを指さす。「お花がいっぱいあった方がいい。」というd児の発案に、我先に…と3歳児にとっては、かなり重いプランタを3人くらいずつで次々と運んできた。

子どもたちは、「ちょうちよさ～ん。今、お花持っていきからね～。」「みんな～こっちにもお花あったよ。」「重い～手伝って～。」「よいしょ、よいしょ。」と力を合わせてプランタをいくつも集めた。パンジーの花の上のせても飛び立たないキアゲハを見て、c児は、「蜜を吸わせてあげないと…」と、別で取り出した花びらの上にそっとおこうとした。c児は、「(チョウは)鱗粉が取れたら飛べなくなってしまう…」と言い、自分の手が強く触れてチョウの羽を傷つけてしまわないようにと、右手で左手首を押さえる姿が見られた。しばらくして、羽が濁き、元気よく飛び立っていく様子に、子どもたちは安心したり、喜んだり、不思議に感じたりしている様子だった。その後、ほやほやの抜け殻を見たり、触ったりしたd児が「中がドロツとしているねえ…」と感じたことを表現していた。



### 【考察・教師の思い】

本来は、タンポポ、アブラナ、アザミの蜜などを好むキアゲハであるが、3歳児にとっては、ツマグロヒョウモンの幼虫が好むパンジーの花も同じ花であると認識しているようだった。担任は、正しい知識を急ぐことなく、重いパンジーのプランタ運ぶをする子どもたちの気持ちを受け止めることにした。

家庭環境がそれぞれ異なることから、c児のようにある程度の知識を持ち合わせている子どももいれば、a児のように「触れていたい」段階の子どももいる。この多様な感じ方は互いにより刺激となっていると考えた。このキアゲハは、もともとc児が捕まえてきた幼虫が羽化したものであったため、a児は、「触りたい」衝動を抑えることができたのではないかと思った。

「c児の気持ちに思いを寄せる」感情が働き、至近距離で顔を近づけても、いつものように触ろうとはしなかった。更に周囲の子どものプランタを運ぶという力自慢の面白さに惹かれて、皆と一緒に運ぶ、チョウが飛び立つのを見守るという経験につながった。生まれたばかりのキアゲハを全力で大切にしようとするc児の思いが伝わり、a児や周りの子どもたちは、「やみくもに触らない方がいいこと」や「何とか飛び立ってほしい」などの気持ちが生まれているように感じた。

## 【3 カブトムシの卵発見!!】 3歳児 R4年7月

感じる・考える・想像する・教師と共に調べる・知る・エサをやる

カブトムシの幼虫が成虫になり、連日カブトムシを見たり、触ったりすることに夢中になる姿が見られた。昆虫ゼリーをあげるのが嬉しいようで、ゼリーの取り合いになることもあった。ある日、a児が、土の中に小さな丸いものを発見した。「何?これ…」というa児に、担任は、「もしかしたら卵かもしれない…」と思ったが、そのまま「何だろうね?」と尋ねた。すると、e児が「卵なんじゃない?」と半信半疑に言い、『卵』という言葉に反応してb児やf児も「卵だ。」とワクワクし始めた。すぐにインターネットで調べてみると、画面と目の前の白い丸いものを見比べて、e児が「やっぱり卵だ～」と確信をもった。嬉しくなったe児、a児、b児、f児たちは、他にも卵がないか土を掘って探していた。

この姿は、後に幼虫の段階でコロコロした固まりを見つけたa児が、「これ卵?」と言うのに対し、e児が、「ウンチだよ。」と言い、a児を含めた皆で、ウンチを処理する姿につながった。



### 【考察・教師の思い】

3歳児にとって生き物の卵は特別なものようだ。おそらく、そこからは赤ちゃんが生まれてくることを知っているからである。「赤ちゃん」は、子どもにとっても本能的に可愛らしい存在であり、その生まれてくるときを見てみたいという好奇心につながった。a児も例外ではなく、興味津々であったため、担任は卵を見つけたことを大切な経験としたいと考えた。カブトムシの飼育図鑑や孵化する様子が載っている図鑑を置き、a児を含め興味をもった子どもに読み聞かせるようにした。

また、カブトムシのエサとなる昆虫ゼリーは、自分たち人間も好んで食べるもので手に入りやすいため、エサを与えたいと思う気持ちが容易に生まれ、世話をする入門的なステップになっていると考えられた。a児にとっても、触ったり見たりする段階から世話をするという生き物との関係性が深まりつつあった。観ることを継続することにより、やがてウンチを抵抗なく処理する姿につながったのは、a児たちの中に、「幼虫から成虫になってほしい」という願いが生まれているからだと思った。

## 【4 ダンゴムシの暮らしを擬人視する】 4歳児 R4年6月

住処を知る・擬人視する・想像する・創造する・愛着が芽生える

g児は、生き物に興味はあるものの自分では触ることができない。ダンゴムシでさえ、怖くて触れないのである。しかし、興味はあるので友達と一緒にダンゴムシを探しに出かけた。しかし、見つけると「早く先生、捕って。」と半ば命令口調で要求する。この頃、g児は、ダンゴムシの家づくりに夢中になっていた。空き箱やペットボトルキャップ、カップなどの空き容器を利用して、根気よく創り上げていった。「ここがね、お風呂で、ここが寝るところ、ここにドアがあるから開けたら

だめだよ。逃げちゃうから。」と、ダンゴムシの家の説明を嬉しそうにした。空き箱を短冊に切り、部屋に仕切りを付けるなどの工夫が見られた。『お風呂』と称するペットボトルキャップは、布テープを裏向きに巻いて、土台の箱に取り付けられていた。「園長先生、ダンゴムシ探しに行こう。」というので、一緒に出掛けた。ようやく見つけたダンゴムシを、「早く捕まえて！」と急ぎ口調で言う。希望通り捕まえて、g児の作った家の中に入れた。

しばらく観察していると、ダンゴムシは右へ左へとモゾモゾ動き回り、『お風呂』の周りの布テープにくっついて動けなくなりました。g児は大慌てで、「誰か～、早く助けて！」と叫んでいる。ダンゴムシに触る必然性が生まれるよいチャンスかと思い、気付かないふりをしていると、g児は、傍にあった棒を持ってダンゴムシを助け出そうとしていた。

### 【考察・教師の思い】

g児にとって、ダンゴムシは自分と同じ性質のものと感じた。自分と同様にドアから入って、風呂に入り夜になって寝ると考えているようだ。全くその通りに生活すると考えているかと言えば、疑問点もあり、g児はダンゴムシが湿気のある暗所を住処にしていることは知識としてあるようだった。それでも、擬人視する理由が2つ考えられた。1つ目は、この時期の発達ならではの、空想と現実を行き来する過程にあるからであると考えた。現実ではダンゴムシが風呂に入らないことは知っているが、空想の中でダンゴムシは風呂に入り、ベッドで眠るのである。幼児はこのようにイメージや表象を用いて、物事を理解していく。つまり、g児は、ダンゴムシのお家ごっこをしていたのではないかと考えられた。2つ目は、生き物に対する愛着が芽生えていると考えた。触ることはできないけれど、捕まえない。捕まえたダンゴムシに喜んでほしい思いから、人間の生活空間のような『家』を創り出したのではないかと考えた。生き物にとっては迷惑な話だが、このように徐々に愛着を示している時期を丁寧に見守りたいと考えた。この愛着の対象は、ダンゴムシ全般ではなく、捕獲した「このダンゴムシ」へのものであると思った。

## 【5 水族館を作りたい！！】 4歳児 R4年11月～12月

### 好きになる・世話をする・想像する・再現しようとする・創造する

3歳児と4歳児は、毎年、10月に自然保護区域となっている達目洞に遠足に出かけている。ここでは、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている『ヒメコウホネ』の花が見られることに加え、岐阜市環境保全課や達目洞自然の会の方々の協力を得て、そこを流れる逆川(さかしまがわ)に生息する『ミナミメダカやヌマエビ、マドジョウ、ヨシノボリ、カマツカ、タモロコ、カワナナ、ザリガニ…』などの生き物に触れる機会をもっている。子どもたちは、水の中の生き物を幼稚園に持ち帰ると、ちょうどその頃5歳児が、『バグズミュージアム』を創っていたことから刺激を受けて、『水族館』を創ることになった。こども会議で水族館のイメージを相談すると、h児、i児らが、「暗かった。」「大きい水槽にたくさん(魚が)いて青かった。」と話した。青い壁になるように段ボールを塗装し出入口にドアを作った。i児は「ここは出口だからありがとうございますって書かない？」と提案し、一文字ずつ調べたり教え合ったりしながらたどしくも一生懸命な文字で書き上げた。h児が言っていたイメージに合うように黒い布を掛けてみると、「真っ暗で何も見えない。」とライトで照らすことになった。家庭から懐中電灯を持参する子どもが増え、水族館は本物のように暗い中で明るく生き物の様子がよく見えるようになった。日を変えて水族館創りに精を出し、今度は折り紙で作ったイルカやペンギンなどで、即興のショーをするようになった。他の学年にも知れ渡り、5歳児の遊びの真似をして、チケットを作って他学年を招待した。

また、皆で水族館を創ることになったことを子どもたちから聞いた保護者の多くは、自分の子どもが水族館に行った経験がないとイメージが湧きにくいだろうと考え、休日に家族で水族館に出かけてくれたことが後から分かった。



### 【考察・教師の思い】

5歳児に刺激を受けて始めた水族館創り。5歳児が虫の生態について説明をする姿に憧れて、水の中の生き物の名前を知っているくらいの知識ではあるものの4歳児の子どもたちにとっては、「知っている」ということが誇らしい様子であった。「知っている」とこと、自分たちが作った水族館の生き物であることから、生き物に愛着が湧いたのではないかと考えた。それにより自分たちがお母さんになったような気持ちで世話をすることにも興味が広がり、更に好きになっていった。また、子どもたちの願いやイメージが実現するようにと協力を惜しまない保護者の存在にも感謝の思いでいっぱいであった。

## 【6 ヨシノボリとのお別れ】 4歳児 R4年12月

### 生と死を知る・かわいそうと思う・生き物の気持ちを押し量る

12月のある朝、ヨシノボリが水中に浮いているのを発見した。i児は、「本当に死んじゃったみたい。」と言い、「袋に入れてあげたい。」と水槽から出しビニール袋に入れた。するとh児が、「水も入れてあげないと息ができなくて可哀そうだよ。」と死んでしまったヨシノボリに思いを寄せていた。k児は、「(ヤゴが死んだふりをしていた経験から)死んだふりしているんじゃない？」と棒で突いてみた。しかし、i児が「本当に動かないね。」「お墓作ってあげる。」と言い、h児が「水も入れてあげないと…」、i児は「息ができないから穴もあけてあげないと…」と次々にヨシノボリを思いやる言葉が出てきた。水を入れたビニール袋の中にヨシノボリを入れ、それを箱に入れ、箱には息ができるようにと穴をあけ、給食後に土に埋めることになった。i児は、水槽を見ながら「カマツカとタモロコがヨシノボリを探しているみたい…」と、しばらくの間、死んだヨシノボリが入った箱を水槽の横に置いておいた。給食後、ヨシノボリが入った箱を園庭の隅に埋めた。m児が「寒くないように。」と上から落ち葉をたくさんかけ、k児は「天国に行ってもご飯が食べられるようにエサも一緒に入れてあげよう。」とエサを入れた。子どもたちは「誰かに踏まれないように。」と、看板を作って立てた。i児は「水族館に来てくれたお客さんにもヨシノボリが死んでしまったことが分かるように…」と、保育室の入り口に手紙を書いて貼った。



### 【考察・教師の思い】

特に[E児]は、ちょうどこの頃曾祖母が亡くなり『死』ということに直面した。きっと周囲の大人が悲しそうに泣き、別れを惜しむ姿を目にしたことであろう。ヨシノボリの死を知ったときに真っ先に「お墓を作ろう。」と提案していた。「水がないと息ができない」とか「箱に穴がないと息ができない」等、子どもたちの知識は曖昧であるが、経験してきた中で自分の身に置き換えたベストな考えを子ども同士で紡ぎ合わせて、ヨシノボリに思いを寄せる子どもたちの姿に成長を感じた。

## (PART: II) 5歳児「A児」と「B児」を中心に、「生き物との関わり」における「対話」を通じた「豊かな感性」と「創造性の芽生え」の育ちと変容

### 【4歳児当初の姿】 ピンク下線 : A児 青下線 : B児

**A児**…得体の知れないものに対して、自分から関わろうとせず、見た目や動きから生き物に苦手意識があった。4人姉妹の末っ子で人に対しては優しく、思いやりがある。強気で挑戦しようとする姿がある一方で、緊張し過ぎて気持ち悪くなったり、不安になったりする姿も多い。周囲の環境に対しては、周りの子の動きに合わせて一緒に行うなど慎重に行動する姿が多い。

**B児**…いろいろな物に興味を示し、自分から周囲の環境に関わる姿があるが、ややマイペースな面が見られた。4歳児になり、友達への気持ちが高まり、一緒に活動する姿も増えてきた。中学生の兄と2人兄弟で、図鑑などの知識が豊富で、知っていることや思ったこと、感じたことを自分のペースで教師等の大人に伝えたい思いが高まっていた。

### 【7 得体の知れない生き物発見！！】 4歳児 R3年4月

#### よく見る・関わる・想像する・怖いと思う・感化される

登園したA児が、「先生、大変、虫がお部屋に入ってきたよ。」と呼びにきた。見るとツマグロヒョウモンチョウの幼虫であった。見目がグロテスクと思うか美しいと感じるかは個人の感性によるものであるが、A児にとっては黒い胴体に鮮やかなオレンジの線が入ったトゲトゲ感のある幼虫は得体のしれない怖いものである様子だった。A児が怖がる様子にB児やC児も怖いと感じるようで、「部屋に入れな～い」と叫んでいる。そこにD児がひらめいたように、ゼリーの空き容器を持ってきて幼虫の上から蓋をした。怖いもの見たさにカップをそっと開けてはまた、「きゃー」と大騒ぎ。そこにE児とF児がやってきて、涼しい顔で素手で捕獲した。一瞬、「えっ？」という驚きの空気が流れた。幼虫を捕まえ、飼育ケースに入れたが、E児は、「これ、ヒョウモンチョウの幼虫だよ。」とボソッと言った。



### 【考察・教師の思い】

生き物との出会い方は、個々によって違いがあり、興味の深さも触れた経験も差が大きいので、4歳児になって初めて多くを経験する子どももいる。A児は、この時点ではまだツマグロヒョウモンチョウの知識がなく、得体のしれない形状や色などから防衛反応が先に現れた様子であった。逆に言えば、より幼い子どもの方が知識がない故に恐怖心が少なく、その頃に多くの生き物と触れた子どもは防衛反応よりも興味・関心が高く表れることになると考えた。

A児たちにとっては、得体の知れない生き物が室内に入ろうとすることを、どうにかして阻止しなければと奮闘する姿が面白い。動く怖い、噛まれるかもしれない、刺すかもしれない、挟まれるかもしれないなどの想像がふくらんだのであろう。同級生のE児とF児が涼しい顔で、素手で捕獲したことで「怖い」思いは和らぎ、「知っている」ことの強みを何となく感じていたように思えた。

### 【8 カメムシは、可愛らしい生き物！？生命の神秘に遭遇！！】 4歳児 R3年6月

#### 不思議を知る・関わる・調べる・知る面白さに気付く・可愛いと思う・心がときめく

ある朝、葉っぱについていた小さな卵から虫の赤ちゃんが生まれた。それを持ってきたのはB児であった。かなり目を近づけてジ～ッと見て見ると、確かに小さな虫の赤ちゃんが5匹生まれていた。あまりにも小さな虫の赤ちゃんの誕生に、A児は思わず「かわいい♡」と心から表現していた。これまでの経験から子どもたちは、図鑑で調べてみたが簡単にはヒットしない。すると、B児の母親が自身のスマホの Google レンズで調べてくれた。それにより、『キマダラカメムシ』の赤ちゃんであることが判明。しかも、写真では、卵がカプセルのようになっている。それでは、本物はどうなっているのか。もう一度目を凝らしてよ～く観察してみると、「見えた～。」、「本当だ！！」と、A児たちは大興奮である。B児は、後から登園したC児に、「ねえねえ、あのさ～、虫の卵の上が丸くなっていて、それで、こうやって出てきたんだよ～。」等と興奮気味に身振り手振りを加えて伝えていた。



### 【考察・教師の思い】

大人の既成概念から、たとえ赤ちゃんだとしてもカメムシに対して「可愛い」という感情はわきにくい。子どもたちは、フィルターにかけることなく、リアルな体験の中で生き物と対峙しながら生き物と自分との関係性を築いていく。それを目の当たりにした場面であった。子どもの純粋な感情に、担任の方が感化され考えさせられた。担任は自分の感情のままに、「気持

## 【考察・教師の思い】(つづき)

ち悪い」、「カメムシ⇒臭い」などの感覚を押し付けなくてよかったと思った。そして実際、既成概念がある担任にとっても、目を凝らしてよく観察したときに、カプセルがパカッと割れて生まれているカメムシの赤ちゃんは、実に神秘的に思えた。

また、この頃の[B児]をはじめとする子どもたちは、これまで経験から知らない生き物に出会うと、「名称を知りたい」という願いが高まり、すぐに図鑑で調べるようになっていた。図鑑でも見つからなかったため、ICTの活用により、より豊かに生き物について知ることができた。写真と本物とを何度も見比べた上で、写真と同様に、カプセルが見えたと確信したとき、子どもたちの中で電気が走ったように心が動いたのだと思う。[B児]の保護者が、我が子の興味・関心に対して熱心に付き合う姿は、子どもの育ちによって保護者も育てられていることを表していた。

## 【9 ミナミメダカとのお別れ】 4歳児 R3年12月

### 生と死を知る・かわいそうと思う・生き物の気持ちを押し量る

10月の遠足で、逆川に生息する生き物を園に持ち帰り、担任と共に大切に飼育してきた。しかし、ある朝、ミナミメダカが死んでいることを発見した。担任は「どうして死んでしまったんだろうね?」と尋ねた。すると、[L児]が「寂しかったんじゃない?」、[A児]が「お母さんがいなかったからじゃない?」と言った。それから、子どもたちは、「かわいそうだね。」「悲しいね。」と言い、担任は、「この子、どうしようか?」と聞いてみた。すると、[A児]は、「お母さんに会いたいと思うから…お母さんの所へ帰してあげよう」と言った。そこで、担任は、環境保全課の方に確認し助言を受け、病死でなければ川に戻してもよいことが分かったため、子どもでも歩いて行ける場所が逆川の中流地点を調べた。逆川の中流地点に着くと、[A児]たちは、「お母さんに会えるといいね。」と言いながらミナミメダカをそっと川に戻した。

## 【考察・教師の思い】

ミナミメダカの『死』では、4歳児なりにどう感じたのか振り返り、言葉にすることで感情に気付く機会にしたいと考えた。担任は、子どもたちの言葉から、死んだ先が“お墓を作る”だけではないことに気付かされた。そのため、何とか[A児]たちの願いに近い形でメダカと別れられるようにしたかった。担任は、他教諭や他機関に相談する中で、病気になった魚は帰してはいけないことを知り、新しい学びになった。生き物と生活する上で必ず『死』に直面することがあるが、それに対して[A児]を含む子どもが、どう感じて、どう向き合うか、自分たちはどうしたいのか、4歳児なりに考える機会を、『生命について考える』でも重要な経験であり、子どもたちの考えや思いに、大人も考える場面として大切にしていきたいと思った。

## 【10 テントウムシの孵化～蛹化～羽化】 5歳児 R4年4月～

### 見る・不思議に思う・かわいいと思う・餌を探る・調べる・観察する

幼稚園の東側にあるれんげ畑に出掛けた際、[D児]が黒色の細い幼虫を見つけた。幼虫の正体が『ナナホシテントウ』と分かり、虫かごに入れて嬉しそうに覗き込んだ。ハルジオン、ノースポールを茎ごとちぎり、虫かごに入れ、保育室に持ち帰った。3匹の幼虫の内2匹は成虫になり、捕まえた[D児]と[G児]は、「一緒に入れてあげようよ。」「そっちの方が、寂しくないよね。」と、大きな飼育ケースに引っ越しさせた。すると、一緒に入れたことで、2匹は交尾をした。

### シーン①『テントウムシが卵を産んだ』 ～撮影成功～

テントウムシを飼育ケースに入れておいてしばらく経ったが、大きな変化はなかった。子どもたちは捕まえた後はそれほど興味を示してはいなかった。ゴールデンウィークに入った初日の4月29日にテントウムシは卵を産んだ。教師は、卵から幼虫が生まれてくる瞬間を、間接的にでも見られるようにと考え、自宅に持ち帰り、タブレットで動画を回し、撮影に成功した。

### シーン②『小っちゃくてかわいい!』 ～孵化に心ときめく～

5月2日、孵化の動画をテレビに映して、子どもたちに早送りで見せた。卵から出てくる様子を子どもたちは、「卵が黒くなった。」「うのようによしている。」「小っちゃくて可愛い!」など、心をときめかせ、感じたことを言葉にした。まだ孵化していない卵(二回目の産卵)が飼育ケースにいることを知らせると、「持って帰りたい!」と思いを伝えた。[J児]が、卵を入れる「家(ケース)」を作っていると、[C児]も、[D児]も真似をして作り、[B児]ら5人の子どもが卵を家に持ち帰った。

### シーン③『産まれたよ!』 ～誕生の直接体験～

連休明けの5月6日、[C児]は、登園時に「みんな～! 生まれたよ～」と1cmに満たないテントウムシの幼虫(1齢幼虫)を見せた。[J児]は「え～! まだ産まれてないよ。」と言いながら、[B児]と一緒に、[C児]のケース(家の中)をじっくり見た。幼虫が3匹、微かに動いていた。それを見た[B児]は、「アブラムシを入れるといいよ。アブラムシがいないと、(幼虫が)幼虫を食べちゃうんだって。」と、家で調べて分かったことを伝えた。「でも、[C児]の家にはアブラムシがいなくて…。」と、言葉を濁らせると、[D児]は、「こあさん(3歳児の保育室前の花壇)に白い花があるから大丈夫。」と言い、二人で階段を駆け下り、新鮮なアブラムシを確保し与えた。卵から育てていることで、愛着が一層増したようで、教師と一緒にアブラムシの餌やりが日課になった。

### シーン④『てんてんが出てきてる! これなんだ!』 ～羽化の瞬間に大興奮～

幼虫は、脱皮を繰り返し大きくなり、絵の得意な[J児]は絵日記にすることもあった。さらに蛹化へと進み、蛹化の様子もタブレットの動画に収めることができ、子どもたちと共に早送りで見ると、見事に殻を脱ぐ様子を知ることができた。





ある朝、とうとう羽化の瞬間に遭遇した。それは、㊦児が、ちょうどテントウムシの蛹を観察しながら、羽化について、家庭にある図鑑で保護者と一緒に調べて知っている知識を具体的に、担任や㊧児に伝えているときの出来事であった。㊦児が、「まずは、羽を出して、それから、段々、段々色が出てくるんだよ。」と伝えていると、なんと、羽化が始まり、㊦児は、「ああ～、今、羽を頑張ってるんだよ。」「そして、どんどん、どんどん色が出てくるんだよ。」と興奮しながら実況中継する。すると、㊧児が「てんてんが出てきてる！」と、斑点模様がうっすらと出てきたことに気づき、担任も思わず、「うわあ、本当だ。」と見入った。すると㊦児は、「これなんだ！ てんてんが出てきているのはこれなんだ！」と大興奮して大きな声を上げた。㊧児は、「初めて見た～。」と、奇跡の遭遇に心を動かしていた。㊦児にとっては、羽が出てきて、徐々に色が付いてくるという図鑑で見ていた知識と、今、実際に目の前で起きていることが、完全一致し、感激で興奮が収まらないといった様子であった。

### 【考察・教師の思い】

れんげ畑で見つけた幼虫は、与え続けたアブラムシで蛹になり、順調に羽化までした。幼虫の変化に興味をもてるように、幼虫や蛹の抜け殻を子どもたちと見つけ、拡大鏡で見られるように環境を整えた。しかし、担任には、子どもたちが虫を捕まえる瞬間は楽しいけれど、捕まえた後は徐々に興味が薄れていくように感じられた。教師は、生き物と触れ合う中で、もっと何かを感じたり、心を動かしたりすることはできないのかと考えていた。そんな時に、㊦児と㊧児の捕まえた幼虫が成虫になり、奇跡的にメスとオスだったこともあり、交尾を行った。もし卵が生まれたら、その卵から生まれる瞬間を子どもたちが目撃したらどんな反応を示すのだろうか・・・教師は期待に胸を膨らませながら、毎日、卵を観察し、ビデオを回した。

孵化や蛹化の動画を全員で見ることで、卵から生まれて進化する神秘を画面越しに体験できた。みんなで感動体験を共有したことで「テントウムシを知りたい気持ち」の高まりをいろいろな場面を感じた。始めは数人で始まった幼虫の飼育は、アブラムシを与え、成長を見守り、大きくなっていく様子を目で見て感じる、変態する様子を目の当たりにすることで、飼育ケースを覗いて絵日記にしたり、自ら餌を探したりする姿に繋がった。日常では見られない瞬間を共有することがきっかけとなり、子どもたちの虫への興味はさらに広がり、今度は自分で育てたいという気持ちに繋がったのだと思う。

### 【おとな会議】

ザリガニ・カブトムシ・チョウなどは、飼育する上で餌が容易であることから孵化させやすいが、テントウムシを孵化させるのは、よくやり遂げたものだと感じた。担任は、子どもたちに孵化の様子を見せたいという強い思いで、園だけでなく家庭に持ち帰り、餌をやり、動画を回し続けていたのだ。その根気にも他教諭たちは心を動かされた。「よく孵化させることに成功したね。」職員室内はこの出来事に感銘を受け興奮気味であった。それは、子どもも同じ思いだったのだろう。子どもが心から生き物を大切にしたいと思うには根気があることである。教師間でも担任に敬意を表する雰囲気が高まった。

ICTの活用により、今まで体験できなかったことを撮影することで観たり、友達と感動を共有したりすることができた。子どもたちの興味に合わせて効果的に活用していくことが子どもたちの生き物への関心が高まるきっかけになると考える。

これまでは生き物に執着している訳でもなく、テントウムシの卵を常に気に掛けているわけでもない、そんな子どもたちの心が動き、生き物の神秘さを味わってほしいと思う教師の願いがテントウムシにも届いたようだ。子どもがいかに関心を持ち、生き物に関わろうとするのか、そこには教師のこだわりや継続的な世話が必要であると感じた。それが、子どもの目に触れ、教師の姿を受け、自分たちもやってみようという思いにつながっていくと分かった。

## 【11 アゲハチョウを捕まえたい】 5歳児 R4年6月～

目的をもって探す・チョウの気持ちを考える・適切な環境を作る・悲しく思う・気づきを周囲に伝える

### シーン①『ミカンの木を植えよう！！』 ～チョウを捕まえる方法を考える～

6月、園庭で虫探しをしていた㊦児は、「アゲハチョウを捕まえたい！」「でも、アゲハチョウがいないんだ・・・」と言葉にした。㊦児は、得意の知識で、「キンカンにいるかもしれない！」と言って一緒に探すが、その日は見つけることができなかった。教師は、㊦児と㊦児と一緒に帰りの会で『チョウの話』を紹介した。

### 【こども会議】

D児：「今日、アゲハチョウを捕まえたかったんだけどいかなかったんだ。」

K児：「そうだね。（この頃）ヒョウモンチョウもないね。」⇒A児：「暑くなってきたからかな。」

B児：「家にアゲハの幼虫がいるよ。」⇒D児：「え？どこに？」⇒C児：「レモンの木にいたよ。」

B児：「僕の家にはミカンの木にいたよ。3匹いたんだ。」⇒C児：「レモンの木は2匹だったよ。」

D児：「じゃあ、ミカンの木が一番好きなんだ。」

J児：「いいこと思いついた。幼稚園にミカンの木をもってきたらいいじゃん。」

B児：「持ってこれないよ。」⇒A児：「じゃあ、幼稚園にもミカンの木を植えればいいんじゃない？」

アゲハチョウが見つからないことからどうしたらアゲハチョウを見つけられるのかと考え、チョウが卵を産みつける環境を作ることを思いついた。偶然見つけるおもしろさから、この虫を捕まえたいという目的を先にもち、それに向かって考え、対話し、遊びを創り出していくという育ちが見られた。



こうして生まれた「幼稚園でもアゲハチョウを捕まえたい」という願いから、「ミカンの木」を植えることが決まり、園務員の先生と一緒に植えた。チョウが来なくなるようにと、㊦児の考えで、近くにはパンジーのプランタも置いた。翌週朝の登園時、㊦児と㊦児は保育室に入る前に、ミカンの木を探すと、「ねえ、聞いて！赤ちゃんミカンの上に、卵があったよ。」と嬉しそうに知らせた。次の日も、その次の日も、卵の様子を皆に知らせた。



## シーン②『卵がない！！』 ～分かりやすくするための試行錯誤～

子どもたちが毎日、卵を観察する中で事件は起きた。ミカンの木にあった卵がなくなっていたのだ。地面にはちぎられた赤ちゃんミカンが落ちていた。A児は、「大変！ミカンが落ちちゃっている。」「ミカンの木を守らなくっちゃ。」と言葉にした。教師は、A児の思いを受け止めつつ、皆で植えたミカンの木の異変やA児の気持ちをクラスで共有したいと思い、近くで遊んでいた子たちに声を掛けた。

### 【こども会議】

ミカンの木の周りに集まって、ちぎられたミカンを見ながら、  
A児：「せっかく卵を産んでくれたのに。」⇒L児：「卵があるって知らずに、誰かとっちゃったんじゃない？」  
B児：「分かった。触っちゃダメって書くのはどう？」  
F児：「でも、こあら組（3歳児）さんは文字読めないんじゃない？」  
J児：「じゃあ、絵で書くのはどう？」⇒D児：「入れないように、こんな感じに（柵を作って）守るのどう？」  
L児：「いいね、それだったら入らないでって分かるもんね。」  
子どもたちのイメージを元にして、園芸支柱、ポリ袋、セロハンテープ、ツルなどを一緒に準備しながら形にしていった。  
B児：「色々な色を使った方が、チョウも『何だ？ここは。』って来てくれるかも。」  
J児：「手の絵と禁止マークを合体させたら、触っちゃダメって分かるかも。」  
思い思いに、「チョウが来てくれるようにするためには？」そして、「3歳児に触られないようにするためには？」の2点について考えを巡らせながらミカンの木が彩られていった。その様子を3歳児が見に来た時には、A児は、「ここから見ているならいいよ。」と、優しく知らせたりしていた。子どもたちの願いは届き、再び、アゲハチョウの卵が産み落とされたのだった。



### 【考察・教師の思い】

『チョウを捕まいたい』という願いに対して、『ここならいるかもしれない』と、今まで得た知識から推測して探したり、振り返ったりするなど、話し合う場を継続して持ってきたことで、自分事として考えを伝えられるようになってきた。また、アゲハチョウをどうしたら捕まえられるか考える場面では、友達の家と同じ状況（一番幼虫が多くいる柑橘系の木を植えること）にしたらいと予想するところが5歳児らしい発想だと思った。教師は、成虫のアゲハチョウを捕まえたいただけなら、アゲハチョウが好きな花を調べて、花でいっぱいにすることやアゲハチョウが生息する場所に捕まえに行くなども、一つの方法だと感じていた。しかし、子どもたちが考えた世界の中で、まず試すことが必要だと思った。卵がなくなったとき、誰かを責めるのではなく、前向きに考えようとする子どもたちの心に、『3歳児なら仕方がないか』という思いをもっていたのではないかと考えた。それは、自分自身が3歳児の頃に、興味本位で生き物と触れ合っても、誰からも責められなかった時期があったからだと予想される。また、卵をどうやって守るか考えを出し合うとき、次こそは孵化できるようにという願いが、3歳児やチョウの立場（二つの視点）で考えながら作ることに繋がっていった。

## 【12 カナヘビの“かなちゃん”】 5歳児 R4年9月～

飼いたいと思う・生き物の行方を心配する・愛情をもって関わる

### シーン①『カナヘビが逃げた！！』 ～カナヘビの気持ちになって考える～

降園後の園庭でE児と3歳児は、小さな卵を見つけた。3歳児が卵を地面に落とした拍子に、カナヘビの赤ちゃんが生まれた。たいよう組（5歳児）の子どもたちは、「何？トカゲ？」「カナヘビだよ。」「かわいい！」と誕生を喜び、保育室で飼うことになった。翌日、E児は、カナヘビをクラスで紹介した。手に乗せて優しく頭を撫でたり、何を食べるかを図鑑で調べたりした。その後、タブレットを使ってインターネットで調べ、『小さなコオロギやバッタを食べる』ことが分かった。

園庭では小さい虫を見つけにくいことから、畑に探しに行くことになった。その矢先、飼育ケースに入れておいたカナヘビが逃げてしまった。子どもたちは、「カナちゃん！どこ行ったの？」「出てきてよ。」と言いながら、30分程辺りを懸命に大搜索した。しかし、見つからなかった。皆が肩を落として、「連れていかなければよかった。」と言葉にしながら幼稚園に戻った。

子どもたちの思いを知り、子どもたちが戻った後も探していた主任教師が、何とかカナヘビを見つけ出した。真っ先に子どもたちの元へ連れていくと、「よかった！」「どこに行っていたの？」と嬉しそうにカナヘビに話しかけていた。

このカナヘビの行動を考える機会にできたらと考え、子どもたちに「どうして逃げたんだろうね・・・。」と問いかけ、こども会議が始まった



卵から孵化したカナちゃん



「カナちゃん、どこいったの？」と必死になって探す子どもたち。

### 【こども会議】

教師：「カナちゃんは どうして逃げたんだろうね？」  
E児：「お母さんやお父さんや友達がいなくて。」⇒B児：「餌を探しにいったからじゃない？」  
F児：「恥ずかしかったんだよ。」⇒A児：「やっぱり寂しいのかな。」  
教師：「どうしたらいいのかな？」  
D児：「たいよう組がお父さんとお母さんになればいい。」  
E児：「順番でお世話をしようよ。」  
J児：「広いお家にしたらいい。その方が楽しいよ。」  
カナヘビが逃げたことで、カナヘビの気持ちになって理由を考える機会となった。これまで自分たちが、カナヘビにしてい

理由を考える。

カナヘビの気持ち  
を想像する。

どうしていきよいかの  
考えを出し合う。

## 【こども会議】(つづき)

た関わりを振り返り、もっとカナヘビに対する気持ちをもって関わるのが、カナヘビが寂しくなく、楽しく過ごせるのではないかと考えた。子どもからは、「逃がした方がよい」という考えは出なかった。それは、自分たちが捕まえ、育ててきたという思いがあるから、そのような思いにはならなかったのだろう。こども会議の後、大きくてきれいな飼育ケースを探してきた。そこに、木片を組み合わせて登る場所を作ったり、水を飲む場所を置いて、自分たちの生活空間を擬人視しながら遊んでいた。生き物が苦手な子どもも勇気を出して触れようしたり、「手に乗せて。」とお願いしたり、水を与えようと可愛がろうとする姿が見られるようになった。日に日に子どもたちのカナヘビへの愛情が増していった。



## 【考察・教師の思い】

テントウムシの時と違い、生き餌のクモを捕食する様子が目に見えて分かり、しかも小さなカナヘビが生き餌のクモをパクッと食べる仕草が、子どもたちにとっては可愛く見え、「うわぁ・・・食べた!」、「かわいい。」と思わず言葉にしていた。確かに小さなカナヘビが、一生懸命生きようとしている姿は教師にも可愛らしく映った。一方で、餌となるクモに情けはなく、カナヘビにのみ愛情が向けられていた。子どもと生き物との関係性によって大切にすることは変わってくる。何かを大切にしようとすると、何かを切り捨てることになる。これが、自然の摂理というものであり、このような体験を通して、子どもたちは自然界の弱肉強食を学んでいくのだと思った。

カナヘビへの愛情があるからこそ、生きるための餌がなかなか見つけられないときに、「畑で捕まえよう」という発想になった。教師は、餌を捕まえに行ったのに、逃げられてしまったというハプニングを、『生き物の気持ち』を考えるきっかけにしたいと思った。逃げるといことは、どんな気持ちなのか。どうするとよいのか、全員がその場面に直面したことで、誰もが当事者として考え、意見が交わされた。「たいよう組で飼ってみたい」という思いが、「こうしたらカナヘビが喜んでくれるかもしれない・・・」と考え、思いを伝え、行動に移すことになったのだと考えられる。

しかし、本来カナヘビにとっては、飼育ケースで飼うよりも、自然界の方が生きやすいのかもしれない。子どもにはその発想はなかったが、教師が必死に見つけてまで飼育しようと思ったのは、子どもたちのカナヘビへの愛情が芽生えてきていると実感したため、飼育することを通して、生き物との関わりや大切に思う気持ち等を深めてほしいと願ったからである。その上で、一度飼うと決めたカナヘビは最後まで面倒を見ることがカナヘビに対する責任であると考えた。

## 【13 カマキリの“カマちゃん”】R4年10月～

動きに興味をもつ・記録する・自然の摂理を知る・知識と現実が紐づく・誕生を心待ちにする・生死を知る・悲しむ・愛情をもつ

### シーン①『食べちゃった。』 ～生き餌・捕食の大迫力～

A児は、自宅でオオカマキリのオスを見つけ、“カマちゃん”と名付け、幼稚園に連れてきた。カナヘビの時と同様に、大切にしたいと思うと、子どもたち自身で名付け、可愛がる姿が見られるようになっていた。A児は、「何を食べるんだろう?」とB児に尋ね、「バッタだよ。」と教えてもらい、園庭を探した。草陰にバッタを見つけ、飼育ケースに入れた。すると、カマちゃんはじっとバッタの動きを見定め、跳んでいるところを瞬時に両鎌で捕まえ、お腹からガブリと食べ始めた。子どもたちは、その迫力に声が出なかった。しばらくその様子を見ると、「うわぁ、食べちゃった。」、「近くで見たの、初めて。」と知識と実体験が重なり、心を動かされていた。



### シーン②『おんぶだ!』 ～愛情が芽生える～

しばらくしたある日、園庭で新たなカマキリを見つけたA児。近くにいた子どもたちに、「(一人では寂しいからと)この子もお家(飼育ケース)に入れるね。」と伝えた。仲間が増えることで、カマちゃんが喜ぶのではないかと考えての行動だった。しばらく様子を見守っていると、新しく飼育ケースに入れたカマキリの上にカマちゃんが乗り、交尾を始めた。子どもたちは交尾とは気付かず、A児は嬉しそうに「おんぶしている!」と言葉にすると、B児は、「交尾しているんだよ。」と答え、A児は、「いいこと考えた!」とタブレットでその様子を写真に撮った。教師が、どうして写真を撮ることにしたのか尋ねると、A児は、「(仲良しなところを)皆にも見てほしいから。」と答えた。教師も同じ思いで、隣でビデオを回した。

### シーン③『入れなきゃよかった・・・』 ～大切な生き物を失い、悲しみが溢れる～

その日の給食を食べ終えた時に、A児が再度、飼育ケースの様子を確認しに行った。すると、カマちゃんが、新しく入れたカマキリに両鎌でがっしりと掴まれ、頭からかじられている最中であった。A児は、不意の出来事に、「何で食べるの?」、「やめてよ。」と、言葉を漏らしながら、しばらくして「もう、入れなきゃよかった。」と言って、泣き始めた。カマちゃんは、瞬く間に食べられてしまった。その様子を見て、周りの子どもたちは、A児にどう声を掛ければよいか、言葉が見つからなかった。



ずっと隣にいたB児は、「メスは栄養がないと、卵を産めないんだよ。」と言った。どうしてカマちゃんが食べられてしまっているのかを説明した。B児は図鑑等の知識で卵を産む前には、オスを食べることを知っていたのだ。教師も、この光景に悲しさと驚きを抱きながら、「赤ちゃんを産むためには、カマちゃん(オス)を食べなきゃいけないってこと?」と確認した。傍に置いてあった図鑑で確認すると、「交尾後にメスがオスを食べることもある」と記されていた。A児は、納得とまではいっていない表情だったが、泣き止み、また飼育ケースを見ていた。

## 【おとな会議】

毎日のようにカマちゃんが話題となった。大人はオスとメスを入れると交尾をすることやメスがオスを食べてしまうことは知識として知っている。しかし、実際に目の当たりにすると、壮絶なシーンであった。自然の摂理をまじまじと見せつけられ、

## 【おとな会議】(つづき)

心えぐられる思いであった。しかし、自然界では当たり前の出来事である。子どもたちに、カマちゃんに対する愛情がある分、この光景がより残酷に思ってしまうのかもしれない。

しかし、担任は、この場面で子どもに直接体験してほしいと願って、あえて何も言わず、A児たちと共にカマちゃんの姿を見守った。実際に、それを体験したA児の思いについて話し合うと、

教師A：大切にしていたカマちゃんが目の前で食べられる姿を見たことで、衝撃が強すぎたのではないかな。

教師B：生き物の残酷さを目の当たりにしたことで、自然の摂理を知り、体験を通して学んでいくと思う。どこに視点を置くのかによって、大切にしたいことが変わってくるよね。

教師C：メスのカマキリにとっては、卵を産んで、より多くの子孫を残すためには必要なことだね。いろいろな立場になって物事を考えられるようにすることが大切だから、よい経験と考えた方がいいと思うよ。

そういう点では、B児が発した「メスは栄養がないと、卵を産めないんだよ。」は、メス側の立場を伝えたことで、A児が違う視点でこの状況を捉えることにつながった。そういう視点を子どもたちが知る機会を作っていくことは多面的に物事を捉える上で大切なことであり、B児はキーマンになりつつあることを確認した。

ところがなんと、約2週間後の登園時のこと、メスのカマちゃんは卵を産んでいる最中だった。(初代カマちゃんが食べられ、残ったメスのカマキリが2代目カマちゃんとなった。) B児はいち早く気づき、「A児ちゃん、早く来て！卵を産んでいるよ。」と、A児を呼んだ。「えー。本当に？」と心を躍らせながら近付き、卵を産む様子を見守った。ようやくA児に笑顔が見られるようになった。「いつ産まれるのかな？」とわくわくしながら図鑑で調べると、春に産まれることが分かった。「春でことは、私たちは小学生になっているときかな？」「幼稚園にいるときに産まれてほしいね。」と、食べられてしまった悲しみから立ち直り、産まれてくるカマちゃんの赤ちゃんを心待ちにするA児たちであった。その後、卵を見に行く他学年の子や教師に対して、「この卵から200匹くらい生まれてくるの！」と期待感に満ち溢れた表情で語っていた。

## シーン④『ずっと一緒にいたい』

### ～大切だからこそ、納得する形にしたい～

2代目カマちゃんに生き餌を皆で与えながら大切に育てたが、2度の出産を終え、1か月後、とうとう動かなくなりました。2度目のカマキリとの別れは、余りに悲しく、その場ではA児はうまく言葉にできず、涙が溢れていた。これまで大切にしていたA児の思いを知っているB児をはじめとするクラスの子どもたちは、全員A児の傍に寄り添った。そこで、自然とこども会議が始まった。



## 【こども会議】

死んでしまった2代目カマちゃんを手に固まるA児の周りに集まって、

D児：「なんで死んだのかな？」⇒L児：「ちゃんとごはんあげていたのにね。」

C児：「寒かったのかな。」⇒B児：「暖かくしたら、動くんじゃない？」

K児：「そんな訳ないでしょ。」⇒D児：「お墓作ってあげる？」

J児：「針を刺して、標本にするのはどう？」

A児は、どの問いかけに対しても反応はしない。悲しきの余り、『なぜ？どうする？』という思考にならないのだろう。それでも、周りの子どもたちは、A児のことやカマちゃんのことを思っただけでなく、どうにかしたいと考えを巡らせていた。

K児：「飼育ケースをお墓にするってことは？」⇒C児：「お花も飾ったらいいじゃん。」

教師：「みんなが考えてくれているけど、A児はどうしたいの？」

A児は、静かに首を横に振った。この場ではA児の気持ちの整理がつかないと思い、しばらく時間を置くことにした。

次の日、A児は、「針を刺すのは嫌。」「ずっと一緒にいたい。」「いつでも見られるようにしたい。」という思いを伝えた。そのため、いつでも見られるように、でもカマキリの死骸がポロポロにならないように木箱に大切にに入れることになった。蓋を開ければいつでもカマちゃんが見られるという安心感により、A児に落ち着きが戻った。



## 【考察・教師の思い】

大切に育てようとしていたカマキリが、新しく捕まえたカマキリと交尾して、最後には食べられてしまったことに、A児は相当なショックを受けた。悲しみに暮れるA児の心を動かしたのは、虫の生態に詳しいB児の言葉だった。食べた理由が、「卵を産むため」と分かると、悲しいけれど、納得はできないけれど、仕方がないといった様子だった。

その後、「(2代目)カマちゃん」と名付けられ、卵を産んだ時、そして死んだとき、誰もがまずA児に伝えた。クラスの皆で大切に育てているのだけれど、カマちゃんに何かあったらまずA児に知らせなくてはという思いになっていた。それは、カマちゃんを自宅で見つけて幼稚園に持ってきたことや餌を探しにいったこと、いつでも気に掛けていたことなどから、愛情をかけていたことを知っていたからである。A児とカマちゃんの関係性の深さが分かるからこそその周りの子どもの行動であった。カマキリの死を巡って、ただ悲しむのではなく、死にも次に繋がる理由があること、死んだ後にどのようにしたいか、方法は一つでないことをカマキリとA児と子どもたちに教えられた。

## 【こども会議】

カマちゃんが死んだ後、帰りの会に5歳児で集まって、「死んでどうということ？」をテーマにこども会議をした。

教師：「(カマキリが)死んでどうということ？」

J児：「もう生きられないってことかな。」⇒M児：「心臓が止まるってことだよ。」

E児：「もう会えなくなるってことじゃない？」⇒I児：「倒れるってこと。」⇒L児：「(い)なくなるってことだよ。」

## 【こども会議】(つづき)

教師：「人間だっていつかは死んじゃうんだよね。(人が)死ぬってどういうことなのかな？」

M児：「死んだら天国に行くんだよ。」⇒B児：「もう会えないってことだよ。」⇒G児：「倒れて魂だけが天国に行くんだよ。」

M児：「地獄だってあるよ。」⇒L児：「会えなくなるのは嫌。」⇒N児：「寂しいよね。」

A児：「生きているうちに、大好きだよってたくさん言っておきたいな。」

教師：「じゃあ、生きているってどういうこと？」

G児：「動いて食べて、好きなことができるってことじゃない？」⇒L児：「ご飯が作れて、食べること。」

D児：「虫とかプールとか好きなことができるんだ。」⇒A児：「生きていると楽しい。」⇒C児：「うん！嬉しい。」

カマキリの死を目の当たりにした子どもたちは、『死ぬこと・生きること』について子どもなりに想像し、悲しみの思いを込めて話していた。心臓が止まるといった現実的なことから天国・地獄といった想像の世界など、死というテーマから子どもが知っている情報や考え、思いが溢れていた。死について考えることで、死は悲しいことであり、大事な人が死んだら泣けてくることである一方で、生きていることは『楽しく』、『嬉しい』ことであると答えた。生きていることは今、自分が感じていることなので、とても前向きな答えであった。どの答えにも正解はない。一人一人の感じ方があっていい。それが自分の言葉で語れ、周りに受け止められ、自分の価値観となっていく。生き物との関わりの中で、今を生きる子どもとの対話を積み重ねていきたい。

## 番外編 カマちゃんがつないだ命

3月、卒園が近付いてきた金曜日の降園時刻、その瞬間は突然やってきた。A児が、「赤ちゃん産まれているよ！！」と、飼育ケースの様子の変化に気付いた。10月に産んだカマちゃんの卵がついに孵化したのだ。一般的には4、5月に生まれるが、子どもたちの「自分たちが卒園してしまう前に元気に生まれてきてほしい」という思いが届いた。飼育ケースの中には確かに茶色の赤ちゃんカマキリが3匹動いていた。子どもたちが喜びを言葉にする中、A児は涙を流しながら飼育ケースを持っていた。L児は「嬉しいね。」と、K児は、「A児ちゃん、お母さんになつたね。」と、それぞれA児の思いに共感しながら、声を掛けていた。B児は、なかなか言葉にできないA児に、「どうしたの？」と尋ねた。すると、A児は「家を持って帰りたい。」と言った。B児たちは頷いたり、「いいよ。」と返事をしたりして、A児の思いに賛同しつつ、「月曜に見せてね。」「100匹生まれるといいな。」と、期待を膨らませて、生まれた赤ちゃんともう一つの卵がついている飼育ケースをA児に託した。



週明け、A児は、排水溝ネットを飼育ケースにかけ、中にはケチャップの餌を入れ、足取り軽く登園した。飼育ケースの中は、まさに、卵(らんしょう)から、60~70匹が孵化している最中だった。A児は、皆に、「たくさん赤ちゃん生まれたよ！ほら！」と笑顔いっぱいクラスの子どもたちに呼びかけた。クラスの子どもたちは、登園後すぐに飼育ケースを囲み、「カマちゃんの赤ちゃんどうなった？」「めっちゃ、いっぱいいる。」「仲良くしている！」「えー！ケチャップ食べるの？」と、新たな命に目を輝かせていた。A児と周りの子どもたちは、嬉しい気持ちはどンドン膨らみ、3歳児、4歳児の部屋、職員室へと練り歩き、全員に知らせに行つた。見せて回る中、飼育ケースの中をよく見ていると、「ねー…なんか動いてないんじゃない？」「えー！？」と言いながら、動きの鈍いカマキリや、孵化しきれずに倒れているカマキリにも気付いた。子どもたちは、なぜ生れてすぐに死んでしまうのか理由を考えた。「寒いから？」「ケチャップ食べられない子がいる？」「餌が足りないんだよ！」と、予想を話し合った。カマキリの赤ちゃんは何を食べるか、家で調べてきている子や、すぐにタブレットを活用して調べたりして、「アブラムシ」を探すことに決めた。園庭では、見つけられないでいると、M児が「大根の葉っぱにいます。」と提案し、「そうかも。」と、ずがるように畑に探しに行くことになった。畑で探していると、葉っぱの裏には、アブラムシは数匹しかいなかった。そこで、いつもお世話になっている地域の泉美おじいちゃんに相談すると、ジニア(百日草)についての大量のアブラムシを分けてもらえた。この春は、3月の気温が高く、ジニアにアブラムシが大量についていた。帰ってすぐに花を与えると、「もう大丈夫。」「元気になるといいな…」と、皆で安心した。さらに翌日、飼育ケースの中で動くカマキリは12匹に減っていた。その事実を知ると、気付いた子たちが声を掛け合い子ども会議が始まった。



## 【こども会議】

「餌をあげたのになぜ死んでしまうのか…」と疑問に思い、口々に話し始めた。

C児：「寒かったんだよ。」⇒L児：「餌が少ないんじゃない？」⇒B児：「(最後に)大人になるのは2、3匹だから…」

D児：「ケンカしたとか？」⇒B児：「葉っぱが重くて逃げられなかったんだよ。」⇒J児：「アリに食べられたんじゃない？」など、どンドン思いを言葉にしました。

C児：「こうなったら一匹ずつ分けるしかない！」

その提案に対して、皆で飼育ケースを集め、カマキリの赤ちゃんを分けることにした。子どもたちが表現していた「仲良くしている！」は、実際には共食しているところだった。どうしたらよいか考え、1匹ずつ分けることになった。生まれる喜びと共にすぐに死と対峙する状況となり、子どもたちは、生き物を育てる難しさを痛感した。それでも、カマキリの赤ちゃんを気にして、水をかけたり、新しい餌に取り換えたりして、皆で小さくてか弱い命を必死に繋ごうとしているようにみえた。また、B児の知識「大人になれるのは、2、3匹」という事実と直接体験が子どもの知恵でどうなっていくのか、見守りたいと考えた。教師も、子どもたちの知恵と思いやりの心で、「無事に大きくなってほしい願い」を叶えたいと強く思った。

そのカマキリは、新年度には、10匹となり、卒園後も担任と新たな子どもたちへと引き継がれていった。カマちゃんがつないだ命が子どもから子どもへとつながっていった。たいよう組で大切にされてきたカマキリがいることで、これまでの過程を知らない子どもたちもどこか特別な眼差しで見つめていた。

## 【14 バグズミュージアムを作りたい!!】 5歳児 R4年10月～

### 生態を知る・再現する・友達と創り上げる・表現する

生き物に関心をもったD児・I児が、家族で夏休みに名和昆虫博物館(岐阜公園内)に出掛けた。昆虫の標本がたくさん飾られていたことや生きているカブトムシがいたことなどを紹介すると、多くの子どもたちが、「行ってみたい!」と言い、ワクワク感が止まらなくなった。そこから、子どもたちの相談により、遠足の際に名和昆虫博物館に行くことが決まった。

### 【名和昆虫博物館での様子】



この大きな鎌で、虫を捕まえて食べるんだよ。「わあ、大きいなあ。」



モルフォチョウがいっぱい! 青や銀色に輝いていて、きれい!



この中にすごく大きな虫がいるんだよ。この仕掛けおもしろい。

### シーン①『たいよう組も本物にしよう!』 ～本物に近付きたい思い～

名和昆虫博物館に行った翌週、D児は、「先生、針ある?」、「たいよう組も本物(名和昆虫博物館のよう)にしよう!」と、ケースの中に並べられた、死んでしまった虫(カブトムシ・カナブン・バッタ・チョウ等)を、針を使ってより本物らしく標本作りを行うことにした。A児やJ児も仲間入りして、「どこを刺すといいのかなあ…」と呟いたり、匂いを嗅いで、「臭いね。」と鼻をつまんだり、腐敗した体が崩れ、グロテスクな姿に2人で顔を見合わせ、苦笑したり、「バッタはお父さんから順番にしよう。」と、背の順に並べたり、「足の所が刺しやすいよ。」と気付いたことを伝え合いながら作った。心が動いて表現している今、教師は、一人一人が何を感じ、どんな気持ちなのかをクラスで共有できたらと、名和昆虫博物館の写真を見ながら、子どもたちと思い出を話しながら振り返った。

### 【こども会議】

死骸にピンを刺して標本作りをしながら、名和昆虫博物館について話し合った。

N児:「やっぱり、モルフォチョウが綺麗だったよね。」

L児:「私もそう思う。」⇒M児:「ヘラクレスオオカブトの角が長かった。」

D児:「幼稚園で育てられたらいいのにな。」

I児:「スタンプ押すのが楽しかった。3つあったよね。スタンプ作りたくなっちゃった。」

G児:「クイズをみんなでやって楽しかったね。」

B児:「たいよう組も虫がいるから昆虫博物館みたいだね。」

K児:「たいよう組が!? (博物館!?)」⇒A児:「本当だ。もう、虫もカナヘビもいるよ。」

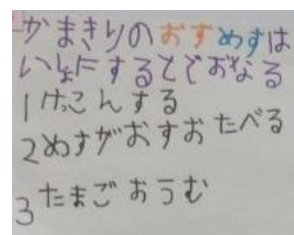
B児:「クイズ作る?」⇒G児:「答えはどこに貼っておく?」⇒D児:「字読めない子はどうするの?」⇒B児:「絵も描いておこう。」など、友達と思いを伝え合った。

子どもたちにとっては、名和昆虫博物館は正に理想の空間だったようだ。すぐに再現しようとしたことから、教師も子どもたちのアイデアでどんな昆虫博物館ができるのか期待感が高まった。子どもたちと話し合いの末に、『たいようバグズミュージアム』という名前が決まり、それぞれが名和昆虫博物館で楽しかったことを再現しようと動き出した。



### シーン②『カマキリのオスとメスを一緒にしたらどうなる?』 ～経験したことをクイズにする～

B児、A児は、大好きなカマちゃんのクイズ作りを始めた。B児は、「カマキリって、オスは飛ばないんだよ。」と、名和館長から教えてもらったことを誇らしげに話し、さらに図鑑を見て、「目が真っ黒になるみたい。」とA児に伝えた。A児は、カマちゃんを見て、「(でも、)今は黄色っぽいよ。」と返すと、「夜(が暗いから黒色になる)だからかな?」と、事実と自分なりの予想を交えて、面白いと思ったことをクイズにして画用紙に書いた。A児は、「カマキリのオスとメスは一緒にするとどうなる?」と、実体験を踏まえたクイズを作ると、それぞれ帰りの会で「A児クイズ」、「B児クイズ」と称して、自分が経験したこと、新しく発見したことなどを、クイズにのせて皆に届けるようになった。メスとオスを一緒にすると、一般的には「結婚する」とか「交尾をする」という答えになるが、このクイズは、「メスがオスを食べる」が正解である。生命の神秘を体験した子どもたちが自分なりの答えを見つけたからこそそのクイズの答えであった。



5歳児が、4歳児にクイズを出しているところ

### シーン③『名和館長に見てほしい!』 ～感謝の思い～

自分たちで作ったバグズミュージアムを大好きなお家の人に見てもらい、喜んでもらった嬉しさから、子どもたちの「伝えたい思い」はさらに広がった。「孝司おじいちゃんや泉美おじいちゃんにも見てほしい。」「名和先生(館長)に見てほしい。」のように、願いは、自分が今まで関わってきて、感謝を感じてきた方(地域の方や、名和昆虫博物館の館長さん)にまで広がっていった。そして、どのように伝えるかを一緒に考えた。「幼稚園に招待したい。」「でも、遠いから来られないかな。」「手紙や写真を送ろう。」などたくさんの考えが出た。子どもたちは、バグズカーニバル(運動会)のときに、生き物の紹介動画を撮ったことを思い出し、「動画(DVD)にして伝えること」に決まった。DVDの中には、生きているテントウムシ、カマちゃん(カマキリ)、クワガタ、カナちゃん(カナヘビ)、ぴ



一ちゃん(おたまじゃくし)等と標本、タブレットの『keynote』を活用して作ったクイズなどを入れた。子どもたちは、まるで、テレビの仕事をしているみたいに、「よい、アクション！」の合図で動画を撮ったり、リポーターのように話したりした。④見は、学芸員のように一つ一つの展示物の説明を堂々としていた。

そして、今まで作った標本、DVDや手紙など、たいよう組の思いを込めて、子どもたちが届けに行った。名和館長は、館内まで案内してくださり、標本にした虫との思い出やDVDなどを、笑顔を変えながら見聞してくださった。また、標本作りのアドバイス(虫を1か月くらい乾燥させてから標本にすること、標本にした日付をつけることなど)も、教えていただいた。憧れの名和館長に届けられたこと、話を聞いてもらえたこと、返事をいただけたことなど、子どもたちの表情からはやり遂げた達成感に満ち溢れていた。後日、子どもたちは、「世界中の人が見てくれたらいいのに。」と、自慢気に話していた。



#### シーン④『えるとまあのぼうけん』 ～劇の会も昆虫の世界～

2月生活楽しみ会では、こども会議の結果、“エルマーのぼうけん”を題材にした劇をすることに。子どもたちがこだわったポイントは、お話に出てくる動物を、これまで自分たちが育ててきた虫や生き物に変えて登場させたいということだった。“エルマーのぼうけん”の登場人物と特徴に合う虫を考え、テントウムシやチョウ、セミ、クワガタなどが登場する中、①見は、大好きだったカマキリのカマちゃんになって登場した。本児からやりたいと言い、衣装も嫌にこだわりながら作り上げた。カマちゃんへの愛情がここでも見られ、②見にとってはカマちゃんとの思い出が幼稚園での生活を豊かにしていたことが伝わってきた。③見はクマゼミの羽根が透明であることにこだわって作っていた。保護者に劇を見てもらえたことで、④見のカマちゃんに対する思い、そしてクラスの皆が虫や生き物への興味関心の高さが保護者にも伝わり、独創的でたいよう組らしい会となった。



カマキリが卵を産み付けているところ

#### 【バグズミュージアムに関する YouTube 動画】

・バグズミュージアムをつくりたい!!

[https://www.youtube.com/watch?v=Ze\\_WxWofMZs&list=PLsP8LtuEBaMkhp0WSz70-szjSBJJBxp&index=16](https://www.youtube.com/watch?v=Ze_WxWofMZs&list=PLsP8LtuEBaMkhp0WSz70-szjSBJJBxp&index=16)

・たいよう ばぐすみゅうじあむ しょうかい

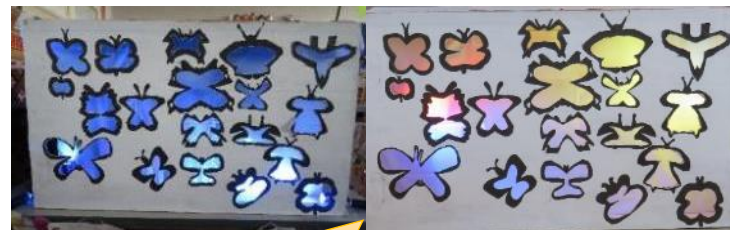
<https://www.youtube.com/watch?v=MIUIgecRQw&list=PLsP8LtuEBaMkhp0WSz70-szjSBJJBxp&index=7>

・「バグズミュージアムようこそ」

<https://www.youtube.com/watch?v=Txf54tKFosA&list=PLsP8LtuEBaMkhp0WSz70-szjSBJJBxp&index=6>



#### 【たいようバグズミュージアムの全容】



【①バグズミュージアムへようこそ】  
カラフルなゲートをつくると、虫や生き物の世界が広がっています。



【②スタンプラリー】  
紙粘土で作ったスタンプが3か所置いてあるよ。見つけたら紙に押しつけてね。★3か所



【⑦モルフォチョウ】  
チョウの形をくり抜いて、横からライトを照らしました。青のセロハンだとモルフォチョウみたいでしょ。新種? の虹色チョウへの変化も見られるよ。

【⑧おみやげ】  
虫や生き物の折り紙や絵をプレゼントするよ。気に入ったものは見つかったかな!?



【⑤生き物展示】  
カナちゃんがいるよ。クイズもあります。  
【ドキュメンテーション】  
これまでの生き物との関わりを写真と共に掲示してあるよ。足跡がわかります。

【⑩標本】  
大切に育てた虫に針を刺して飾ったよ。全部で31体の虫が飾られているよ。木箱にカマちゃんもいるよ。



【④クイズ】  
虫や生き物に関するクイズを掲示したよ。経験したことを3択にしてあるよ。難しかったらヒントをあげるよ。

【⑥デジタルクイズ】  
タブレットで子どもたちが作成したクイズを紹介します。写真が動いたり、文字が出たり消えたりするよ。



## 【考察・教師の思い】

こども会議で対話する中で、たいようバグズミュージアムの遊び方のイメージが少しずつ共有されていった。すると、「もっと可愛くしたい。」と飾りを作ったり、「(名和昆虫)博物館と同じように。」と、スタンプラリーの紙やスタンプを製作して用意したり、来てくれた人にお土産を渡すことなどを考えた。

名和昆虫博物館で、ヘラクレスオオカブトやギフチョウの飼育ケースをじっくりと観察していたこともあり、カナヘビの飼育ケースに土がないことに気付いた。その気付きを教師に伝え、さらに図鑑で調べ始めた。カナヘビを気にして餌をあげていた☑見も、①飼っている生き物を継続して大切に育てつつ、②博物館の真似をして、さらにかっこよくした標本コーナー、③体験して知ったことを問題にしたクイズコーナー、④生き物について知識を説明する役割など、生き物への興味や伝えたい気持ちの高まりが形になってきた。

子どもたちが主体的に自分たちの博物館を作ろうという気持ちになってきているのを感じた。それぞれの子どもたちの作りたいものを形にしなが、自分の好きなこと、できること、やってみたいことの中で、各々の力を発揮していった。皆が名和昆虫博物館を知っていることやこれまでの生き物との生活を共に経験しているからこそ、同じ方向へ一緒に進めていく楽しさにつながったのだろう。図鑑からの知識だけではない、直接体験からの学びであるので、生き物の気持ちを押し量り、生き物への関係性が深まり、それぞれの立場を考えるようになったことで、友達を思う気持ちも育ってきたのだと思った。

## 6 まとめ

### 研究内容① 関わり方の変容により、生命の尊さや大切にしようとする気持ちが高まる

3歳児から5歳児までの生き物との関わりについて事例を集積することで見えてきたのは、生き物が“物”から“大切な生き物”へと変容していったことだと考える。初めて出会う生き物は、『動き』、『見た目の不思議さ』、『きれいさ』、『形や大きさ』など視覚的な特徴から『見たい』、『触りたい』、『捕まえたい』という思いが強い。それにより、子どもたちは瞬間の出会いを求めていることが多かった。そこに心を動かすことを繰り返す中で、生き物の名称とマッチングさせたり、いろいろな生き物があることを知ったり、詳しく知りたいという思いで生き物に関わったりしていた。

次第に、生き物の特徴に気付くようになり、どんなものを食べるのか、どんな場所を好むのかなど、擬人視しながら、日常の活動や状況を再現しようとしていた。自分もお腹がすくご飯を食べることから、この生き物も何かを食べたいだろうと考え、エサとなるものを探して与えたり、時には、飼育ケースの中にベッドやお風呂を作ったりする子どももいた。生き物を飼育ケースに入れて一緒に散歩したり、プランコに乗せて押したりする子どももいた。一方で、散歩の途中で他の遊びに夢中になり、気付いた時には、飼育ケースの中で生き物がぐったりとしていて、「しまった！」と思うこともあった。生き物への思いはありつつも、気持ちが途切れたり、自分の思いが強すぎて生き物にとっては生活しにくい環境になっていたりすることもあった。そうしながら、他人の視点や役割を理解し始め、徐々に自分以外の生態や感情に気付くことが増えていった。その過程を経て、知識と実体験がつながり、『大切にしたい』という気持ちが芽生えてきた。その過程を積み重ねることによって、自分たちが関わっている『この生き物』に特化して愛情をもって関わる姿へと変容していった。

いろいろな関わりの中で生き物の特徴を知り、卵を産む環境を作ったり、エサとなるものを調べたり探したり、そして、『生』『死』に直面した時には、生き物の気持ちを考えたり、自分や友達と対話を重ねることによってどうしたいか気持ちを確かめ合ったりした。単にお墓を作ることだけが死に直面したときの方法ではないことを子どもたちから学ばされた。愛着から愛情をもって関わってきたからこそ、単純に決められるものではなく、落ち着いた考えられるようになるには時間も必要であった。もちろん、このような経験をすればどの生き物に対しても同じ熱量で関わられるのかと言えばそうではない。しかし、これらの経験をした子どもたちにとっては、愛情をもって関わり、生き物のことを思いやり、敬おうとする心の育ちがある。☑見がカマキリに特別な思いをもっていることを、周りの子どもは☑見への特別な思いから読み取ろうとしていた。子どもは『ものやこと、人』との関わりの中で、心を動かし、それぞれの関係性を深めていくことが分かった。

### 研究内容② 対話を通して、生き物や友達への見方や思いやる心が育まれる

5歳児では、問いや願いが生まれたときに、友達やクラス全体で、「こども会議」をする中で、自分の考えを相手に伝えたり、聞いたりしながら、対話を重ねてきた。自分一人の考えでは思いつかないことでも、新たな考えが生まれたり、数人で対話することにより、考えが深まったりすることがあった。帰りの会は、クラスの皆が集う時間であるので、その日に起きたことについて写真を通して振り返ったり、そこでこども会議を開いたりした。子どもたちが発言したことをホワイトボードに書くことによって、話し合いの内容が視覚的にも分かるようにしたり、次の日でも見返すことができるようにしたりした。対話を通して、生き物に対する一人の思いが周りの子どもへと広がり、生き物が苦手と感じていた子どもも、生き物の特徴を知ったり、生き物に思いを寄せる友達の存在に気付いて、育て方について一緒に考えたりする子どもも出てきた。必ずしも皆が生き物に親しみをもつとは限らない。しかし、生き物がいることによって生活が彩り、生き物の不思議さ、偉大さ、儚さが子どもたちの対話を生み、豊かな感性と創造性の芽生えにつながっていることは間違いない。

### 【A児について】

☑見は、もともと虫が苦手であるにも関わらず、カマちゃんとの関わりを通して、生き物に対する愛着や愛情が湧き、世話をする中で生や死に直面して様々な感情を抱きながら、生き物と共に生活を紡いできた。初めのうちは、生き物に漠然とした恐怖心があり、触ることも躊躇していたが、テントウムシが孵化する様子を見たり、アゲハチョウが卵を産むように考えたりするうちに生き物に対する愛おしさを感じるようになった。そして、家庭で見つけたカマキリ(カマちゃん)をきっかけに、さらに愛着が増し、カマちゃんが生活の中心になっていった。周りの子どもたちは☑見がカマちゃんのことを思う姿を見ているからこそ、カマちゃんに変化があったときにはすぐに知らせ、一緒に一喜一憂していた。カマちゃんがメスに食べられたときや2代目カマちゃんが死んだときに、☑見を支えたのは、☑見をはじめとするクラスの子たちだった。☑見の気持ちを察しつつ、メスはオスを食べないと卵を産めないという特徴を知らせて、自然の摂理を伝え、気持ちを落ち着かせられるようにした。また、「なんで死んだのだろう？」と考えを巡らせたり、お墓を作ったりすることを提案したりす



ることによって、**A児**の悲しい気持ちを少しでも紛らわせるようにしたりしていた。**A児**にとっては、クラスの友達がこのように関わってくれていることが伝わってきて、悲しい思いをもちつつも気持ちを調整していくことにつながった。一人ではどうしようもできないこともある。それが友達との対話を通して、気持ちが落ち着き、次への行動に移すことへとつながっていた。4人姉妹の末っ子である**A児**は、世話をしなければ死んでしまう生き物に対し、自分が「お母さんになる」ことを通して、自分の存在価値を感じ、自分への自信を高めながら生き物との関係性を深めていったのだと思った。

### 【B児について】

**B児**は、知識先行で図鑑から得た知識をやや一方的に発信していたが、生き物との関わりを通して知識と体験が重なることを通して、大きく心が動き、自信が深まり、心の余裕ができることで、相手を受け入れたり、状況を読み取ったりするといった受け入れる器が大きくなった。特にカマキリの死の場面では、**A児**の思いを汲み取り、メスのカマキリがオスのカマキリを食べた理由を優しく伝える姿から相手の気持ちを考えようとする成長が見られた。名和昆虫博物館では、名和館長に疑問に思ったことを直接尋ねるほど知りたいという思いが強かった。たいようバグズミュージアムでは、図鑑やタブレットから新たな発見があるとクイズにして伝えるなど目的に向かって行動する力が育っていた。徐々に、自分の知識を表出するときに、どうしたら相手に聞いてもらえるのか考えて、相手の状況に合わせて話すようになっていった。それは、聞いてもらえたり、認めてもらえたりしたことによる自己肯定感の高まりから育った力であろう。**B児**の知識が他の子を納得させる要因になったり、体験による確かな知識があることで自信をもって発言できたりすることがあった。人は好きなものやことをとことん探究することを通して、自己表出したり、友達との生活が一層楽しさを増したりすることにつながることが分かった。

### 研究内容③ 教師は子ども目線で共に心を動かすパートナーであると再認識

子ども同士の対話(こども会議)に加え、教師間での対話(おとな会議)も大切にしてきた。子どもの姿から教師間での哲学的な話し合いも含めて、ざっくばらんに話してきた。例えば、生き物のなぶり殺しについては、どう理解し、どう子どもたちに指導していくのか話題になった。『生き物との関係性や出会い方によって大切に思う気持ちは違うという考えや子どもが乱暴に扱っているとかわいそうに思うという考えなど多様であった。』どれが正解という訳でなく、いろいろな考え方があるということを確認できた。それは子どもにも求めていることであり、一人一人が思いをもち、それを周りに伝えていくことによって、新たな考えや価値観が創られていく。おとな会議でも同じことが言える。教師が多様な考えをこうして伝え合い、互いに認め合いながら、自分を振り返って考え方を整理したり、新たな考え方を加えたりする営みが教師の質を高め、子どもの豊かな感性や創造性を高めていくことにつながると考える。

教師間の「おとな会議」を通して、一人一人の教師が子どもの心を深く読み取り、一度読み取った後に保育を紡ぎながら、多面的に見直し、計画を変えようとする姿が育った。その考えを気軽に伝え合える組織に変容してきた。正に、子どもを真ん中においた保育を深く考える姿勢が身に付きつつあると捉えた。

## 7 今後の方向性について

自然に恵まれている本園の子どもたちは、生き物が生活に溶け込んでいる。生き物に興味をもっている子どもたちは多いが、生き物の何に興味をもっているのか細分化すると、様々であることが分かった。見る・触れる・感じる・比較する・想像する・名称を調べる・考える・世話をする・生態を知ろうとする・観察する・創造する・愛情をもつなど様々であった。生き物との関わりは、日常である。しかし、大人の価値観で、「そんなに触ったら死んじゃうよ。」「捕まえたらかわいそう。」「早く逃がした方がいいよ。」「(羽化したら)逃がしてあげよう。」「(死んだら)お墓を作ってあげよう。」などの言葉を使っている自分がいたことを思い出す。思い返せば、子どもは、まだそのような思いがなかったり、そこまでの愛着をもていなかったりすることもあったのではないかな。もちろん、生き物を無下にしてもよいと言っている訳ではない。子どもが生き物を尊く思い、大切にしようになるには生き物と関わる時間とそこでの心の育ちが必要になってくるのである。

名和昆虫博物館の名和哲夫館長はこう語った。「生き物は一度捕まえたら死ぬまで面倒を見た方がいいと思います。捕まえられ、人に育てられた生き物は脆弱化している。それを自然に戻すと生態系に影響が出る。小さい頃にはたくさん生き物に触れ合って殺してしまう経験も大切である。」その意味は、昆虫は生き物の中でも、種類、数ともに最多であり、生き物との関わりの中で子どもは、命の学びをする。幼児に虫との関わりで、大人が、「かわいそう」、「気持ち悪い」と言えば、その時点で、探究は止まってしまう。だから少しくらい殺してでも関わることを保障することで探究が深まっていくということと解釈した。捕まえたら、ずっと観察することによって、生き物の特徴に気付き、神秘的なことを体験し、様々な感情を抱くことになる。時には死んでしまうこともあるが、それらを経験することによって、相手の思いに気付いたり、思いやったりする心の育ちにつながっていく。それが子どもにとっての探究である。

『生・死』については、実体験を通して子どもなりに感じることを、他児の感じ方を知ることが大切で、子どもとの関わりの中で教師も感じ方が変わっていくと考える。生きるということは、自分が生きたり、子孫を残したりするために必要なことである。仲間を食べたり、共食いしたりすることもある。それが自然の摂理である。これらを知ることにより、自分も自然界の一員であることを感じ、また、家族や友達、地域の方たちから自分が大切にされていることを感じることもつながると考える。

今後も、生き物との関わりを続けながら、子どもと生き物、子ども同士、子どもと教師、教師同士、子どもと保護者、教師と保護者、地域の方との関わりなど、いろいろな対話をもち、子どもの科学する心を育ていけるように子どもの心がときめく瞬間に寄り添える教師でありたいと願う。子どもの興味・関心に寄り添い、魅了され、研究を深めてきたこの教師集団、全面的に協力して下さった保護者、地域の皆様に心から感謝申し上げます。

研究代表者・執筆者： 藤井 佐由美、磯村 満、河田 涼司

研究同人： 足立 潤子、棚橋 沙紀、山田 美森、渡邊 由理歌、山下 瞳子、古澤 まき子